

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16658

研究課題名(和文)イスラエルのユダヤ人の言語的多様性：ユダヤに内包されたイスラームの研究

研究課題名(英文)The Variation of Jewish Languages in the State of Israel: Jews from Islamic World

研究代表者

鴨志田 聡子 (Kamoshida, Satoko)

東京大学・大学院総合文化研究科・特別研究員

研究者番号：10773848

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はイスラーム地域出身のユダヤ人の言語と文化の現代イスラエルでの展開を記述しようとしたものである。報告者は文献調査に加えカイロ、イスタンブール、イスラエル、米国各都市等において当事者に直接会って聞き取り調査を行った。するとイスラーム地域在住・出身のユダヤ人の言語と文化の現状と継承に特徴が見られた。特に一般的にユダヤ社会で多数派とされる東欧出身のユダヤ人と比較すると次のことがわかってきた。次世代への言語、文化、そして集合的記憶の継承を積極的に展開してきた東欧系ユダヤ人に対して、イスラーム地域在住・出身者は一見継承に消極的である。この背景には記憶と現状の「語りにくさ」があることがわかってきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

【学術的意義】別々の分野として研究されがちなイスラームとユダヤ、ユダヤ人の各言語についての研究分野に融合のきっかけの一つをつくった。既存の分野を越え積極的交流を行い各分野の研究者や当事者らの潜在的関心を確認した。集合的記憶の継承に「語りにくさ」、移民の場合特に関係国の国際関係が壁となることを見出した。

【社会的意義】本研究で得た知見を国内外の一般社会に向けて報告し理解を深め関心を広げた。イスラーム地域のユダヤ人の言語と文化について実践を通して学べるように、2022年秋に言語研修『カイロ・ゲニザ講読』(講師：A. アシュル、鴨志田、於：東京外国語大学AA研、一般参加可)として企画している。

研究成果の概要(英文)：This research investigates the situations of languages and culture among Jewish people from the Islamic world and the contemporary State of Israel, comparing it to their situations in the Islamic world and the United States. The investigator visited Jewish people in Istanbul, Cairo, and some cities in the State of Israel and the United States. Focusing on their languages and culture, she tried to see the process of the reconstruction of their identities. Her investigation was based on participant observations of cultural activities, direct interviews, and media. The investigator found that the Jews from and in the Islamic world could have difficulties in "telling." Their unsharable memories and present situations could cause it. The investigator's next project, "Collective Memories of Jewish People and Ladino in the Former Ottoman Empire," continues this research.

研究分野：人文学

キーワード：マイノリティ ディアスポラ 移民社会 疎外感 言語の継承 集合的記憶 ト라우マ 語り

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(0) 報告書では本研究題目に使用した「ユダヤ教徒」ではなく「ユダヤ人」という用語を用いて報告する。本研究を進める中で、さまざまな事情によりユダヤ教徒ではなくなった者もときに「ユダヤ人」としての自覚をもち、文化的な活動をしていることが確認できたためである。

以下の3点から、本研究の着想に至った。

(1) 世界の歴史や地域情勢を概観するためには、ユダヤ人について正しく理解することは不可欠である。そしてユダヤ人の全体像を把握するためには、彼らの多様性についての研究は欠かせない。中でもイスラーム地域在住・出身のユダヤ人についての理解は、最も重要なことの一つである。イスラーム地域出身のユダヤ人の存在は中でも大きい。しかし一般的に「ユダヤの文化」というと、イディッシュ語文学やクレズマーなど、キリスト教地域で生まれた東欧系ユダヤ人(東欧出身のユダヤ人)の言語や文化が連想されがちで、実際の多様性がなかなか反映されにくい。その背景には海外でのユダヤ研究において、東欧系ユダヤ人が代表的、支配的な位置づけにあったことがある。海外の影響を受けながら培われた日本のユダヤ研究や文化紹介はそれを踏襲しがちであった。イスラエル建国やパレスチナ問題、地域情勢の不安定化などでの影響を受け、ユダヤ人がイスラエル国(以下、イスラエル)や欧米などへ移出し、イスラーム地域におけるユダヤ人の人口は激減した。イスラーム地域において独自の文化を保持してきたユダヤ人やその子孫の間に、移住先の欧米やイスラエルにおいて自らの独自文化を再活性化させようとする動きが見られる。

(2) 報告者は本研究の前にイディッシュ語話者に焦点をあて、イスラエル、東欧、米国での活動を中心に調査した。イディッシュ語についての調査を進める間に、別の大きな移民集団であるイスラーム地域出身ユダヤ人らの存在に気づいた。そして彼らの間で言語学習活動や集合的記憶の再構築が行われているのかについて調べる必要があると考えた。

現代イスラエルにおいて、東欧系ユダヤ人たちのイディッシュ語学習活動を参与観察し、当事者たちへの聞き取り調査した。すると彼らが自分らしさを追求し、東欧系ユダヤ人としての集合的記憶を再構築していることがわかった。そして彼らが単にイスラエル人としてヘブライ語を話しているだけでは、自分たちのアイデンティティを充足しきれないと考えているようであることがわかった(鴨志田 2014)。イディッシュ語は東欧出身のユダヤ人の言語として日常生活や創作活動の中で使われてきた。しかし20世紀半ばのホロコーストで人口が激減したことや移住先での言語的同化(米国では英語を、イスラエルではヘブライ語を話すようになる)などにより話者が減少した。さらにシオニズムやイスラエル建国の影響でヘブライ語教育も熱心に行われ、その一方で相対的に他の言語の地位が下がった。これはイディッシュ語に限らず、さまざまな地域からの移民の言語に起こった。移民らがもともと使用していた言語は、移民第一世代の間で使い続けられることは多々あった。しかし一部の例外を除いて、次世代にはなかなか継承されなかった。移民第二世代の「母語」をヘブライ語にすることを理想として教育が行われ、実際、大半の人々の第一言語がヘブライ語となったのだ。

(3) 日本ではイスラエルの研究は、宗教や思想的視点、政治的視点を中心に行われてきた。特に政治的視点からはイスラームとユダヤ、パレスチナとイスラエルなどの二項対立の構造の下に議論されがちである。しかし報告者は現実はいずれもより複雑で、単なる二項対立の枠組みでは理解は深まらない。二項対立の構造で整理しようとする、複雑な事実が見えなくなるのではない危険性がある。ユダヤ人だけをみても、出身地の異なる者たちの中で共通点とともに言語や文化に差異が見られる。報告者は日本に住む人々が現代を生きるイスラーム地域在住・出身のユダヤ人の状況を具体的に知ることで、ユダヤについて多面的に捉えられるようになるだろうと考えた。非当事者が彼らの状況について理解を深めることが、ゆくゆくはユダヤとイスラームの相互理解の助けになる可能性もあるのではないかと期待した。

### 2. 研究の目的

本研究はイスラーム地域在住・出身のユダヤ人の言語と独自のアイデンティティを調査し、ユダヤ人の多様性を描き出すことを目的とした。主に次の3点について観察し記述することを目的とした。(a)言語状況や言語を次世代に伝える継承の活動、(b)時代と地域ごとの彼らの言語の状況、(c)独自の言語や文化を中心とした人的ネットワークの形成。

### 3. 研究の方法

文献調査とメールやSNSでのやり取りにより選出したイスラーム地域とイスラエルと北米の都市のユダヤ人コミュニティを実際に訪問し、関係者への聞き取り調査や集会の参与観察を行った。そして、以下の4点を繰り返しながら研究を進めた。

(1) 言語や文化を継承する活動内容や状況の調査(集団についての調査)

メディアの記事、動画、過去に行われた聞き取り調査、ウェブサイト、オンライン・コミュニティがあればその活動を調査した。対面式、オンラインの活動を参与観察した。実際に調査を進めながらイスラーム地域ユダヤ人の地域、文化、言語的特性に合わせ、適宜方法を修正した。

(2) 当事者から個別に聞き取り調査(個人についての調査)

イスラーム地域在住・出身ユダヤ人に直接会って居住地の生活、文化、言語を主題に話を聞いた。相手の賛同が得られ環境的に可能であればそれを録音した。現地の研究者などに報告者の研究、

関心についていねいに説明し、理解が得ることで人を紹介してもらった。会う相手に偏りが出ないように努力した。

### (3) 調査結果の報告と意見交換（調査結果、今後の方向性の確認）

イスラーム地域のユダヤ人の文化的多様性について、これまで報告者が得た情報と考察について専門家や当事者らに報告、意見交換し、今後の調査の方向性を決めた。また他の分野（例えばパレスチナ研究、文学研究など）の研究者やその他の非当事者にも報告することで、本研究の広がりを探るとともに精度を高めることを試みた。

### (4) 東欧系ユダヤ人の場合との比較

報告者がすでに調査を行っていたイディッシュ語の場合と比較しながら進めた。比較は最善の方法かはわからないが、すでにわかっている移民コミュニティについての調査の応用は有効であった。

## 4. 研究成果

以下、主な調査と報告について、本研究の進行状況と成果を時系列で具体的に記述した。調査者の実情も研究成果に関係するので一見報告者の個人的な状況も重要と考えて述べた。

### 【2016年度】

初年度には報告者は本研究を遂行するための基盤を作ることに力を注いだ。これまでの研究について報告しながら関係者に協力をお願いし、現地の状況についての情報収集を行いながら、本研究を遂行する計画を立てた。資料収集や現地状況の調査、地域専門家に本研究について、研究者や当事者に説明し、面会や情報提供のお願いなどを行った。訪問先については、資料調査したり、専門家や現地の人々の助言を受けたりして選定した。

最初の現地調査は、2016年6月にイスラエルで実施した。エルサレム・ヘブライ大学資料収集の他、イスラエルのイラン系ユダヤ人とイラク系ユダヤ人のヘブライ語作家や教育者などへの聞き取り調査や集会の参与観察を行った。またトルコ系ユダヤ人のシナゴグを安息日に訪問し、コミュニティへの活動に参加し、聞き取り調査を実施した。比較対象として、東欧系ユダヤ人の作家や研究者、集会も訪問した。さらにユダヤ研究者向けのワークショップに参加し、報告の際に本研究について説明し協力をお願いした。イスラエルで生きるユダヤ人としてのアイデンティティを構築するために、移住前の生活や言語に焦点をあてる傾向が見られた。イスラエルでは多くの作家がオピニオンリーダーとして注目され、彼らの社会的影響が大きい。

研究における文学の重要性がわかったので、文学研究にアプローチした。11月に科研費「越境と変容—グローバル化時代のスラヴ・ユーラシア研究の新たなパラダイムを求めて」と早稲田大学文化構想学部の文芸ジャーナリズム論系と共催でイスラエルの文学研究者を招聘し、イスラエルの作家についてのシンポジウムを開催した。東欧系ユダヤ人には、独自の言語イディッシュ語と、世界史にインパクトをもって位置づけられたホロコーストを軸に、集合的記憶が継承される仕組みがある。しかしイスラーム地域のユダヤ人においては、世界的に知られる歴史的事実と集合的記憶の関連付けが弱いことがわかった。

当初は6月にイスタンブルに移動して現地調査することを予定していたが、渡航予定日の直前に、アタチュルク国際空港において銃撃と爆発が起こり、続いてクーデター未遂事件があり、非常事態宣言もあったため、安全を考慮して初年度のイスタンブルでの現地調査を中止した。

### 【2017年度】

2017年4月に、初年度の調査について「イスラーム地域出身のユダヤ人と言語共同体」として第16回東京移民言語フォーラム(東京大学)で報告した。米国はもちろんイスラエルに移住したイスラーム地域出身のユダヤ人は、移民コミュニティとしての分析も必要であるからである(イスラエルでは一般的にイスラエル人の移入は「アリア(のぼること、帰還)」とされ、一般的なものとは区別される)。

移住前の状況と移住後の状況を比較するため、8月にカイロとイスタンブルのユダヤ人コミュニティや研究者を訪問し、資料収集や聞き取り調査を行った。イスタンブルでは、ユダヤ系組織や出版社、新聞社、博物館、宗教施設などを訪れながら、現地のユダヤ人コミュニティで活動する人々に直接会い、彼らの言語や文化の継承活動について聞き取り調査をした。イスラーム地域のユダヤ人においては、パレスチナ問題などをきっかけに、イスラエルと彼らの居住国との関係が度々悪化した。イスラーム地域のユダヤ人らは居住地への強い帰属意識を保ちながら、受入国イスラエルに移住する。彼らの移出は、必ずしもシオニズムと直接関係せず、しばしば苦渋の決断であることも確認された。

12月に米国ユダヤ学会(ワシントンDC)にて研究動向の調査、本研究への協力をお願いをした。イスラーム地域のユダヤ研究における参加者の多くは当事者で、研究活動は継承活動の重要な一部であることが確認できた。地域横断的な研究は少ない傾向にあることがわかった。

2017年度に外務省のカケハシ・プロジェクトにユダヤ人研究者派遣が新設された。報告者は第1回目の派遣で2018年3月にニューヨークとボストンのユダヤ人コミュニティや研究者を訪問し、次年度からは本研究の最終年度まで派遣の企画と引率を担当することになった。

初年度からの調査について「イスラーム地域のユダヤ教徒：カイロとイスタンブルの場合」(鴨志田聡子, 東京大学言語学論集(39)145-159, 2018)にまとめた。

## 【2018 年度】

2018 年 6 月に本研究で得た知見をもとに加筆修正し『イスラエルを知るための 62 章』(立山良司編著, 鴨志田聡子他共著 明石書店, 2018) 第 2 版を出版した。

8 月にイスラエルにおいて現地調査を実施した。レイヴィック・ハウスにおける会議で報告をした。東欧系ユダヤ人の作家や文化人が主体となる集いでは、東欧系ユダヤ人についての話題が中心である。ところが本調査について報告したところ、東欧系ユダヤ文化人の中に、イスラーム地域出身のユダヤ人との文化交流と相互理解が非常に重要だと考えている人の存在が確認できた。エルサレム・ヘブライ大学、ハイファ大学、ベン・グリオン大学、放送大学のこの分野における主要な研究者に本研究について報告した。今後の方向性についての意見交換し、情報提供を受けた。またアフラにてイラク出身のユダヤ人に聞き取り調査を行った。彼はイスラエル移住から半世紀以上経った現在でもアラビア語(フスハー)で創作活動を続けている。東欧系ユダヤ人がドイツや東欧の過去を内包するように、イスラーム地域出身のユダヤ人がアラブを内包している姿が現代イスラエルで確認できた。

10 月に国際会議 III Congreso Internacional sobre el español y la cultura hispana en Japón (セルバンテス東京)にて、イスタンブールのユダヤ人について「私たちはスペインから来た: ラディノ語の記憶と文化」という報告を実施した。ラディノ語はユダヤの独自言語であるが、その成り立ちや言語的特性などから、これはスペイン語の変種としても考えられる。この報告に加筆修正した「Ladino, judeoespañol, porque vinimos de España»: Memoria y cultura de los sefardíes」(Actas del III Congreso Internacional sobre el español y la cultura hispánica del Instituto Cervantes de Tokio, Instituto Cervantes, 2020) はオンラインで公開される。

2019 年 2 月に京都大学にて、イラク系ユダヤ人を対象とするイスラエルの研究者と意見交換をした。イスラエル社会は東欧系ユダヤ人が中心的に形成してきたとされている。イスラーム地域のユダヤ人が自分たちの言語を使うことを避ける傾向があったようである。これはいわれのない劣等感によることが多いが、実は似たような現象が東欧系ユダヤ人にも見られる。しかしお互いが同じような経験をしてきたことは、当事者たちにはあまり知られていないようだということわかってきた。

報告者は 2019 年 2 月に国際会議 ucLADINO (カリフォルニア大学ロサンゼルス校)において研究発表し、ラディノ語の研究者の他に、セファルディー系ユダヤ人と研究者らの文化、研究交流に参加し本研究について説明して協力をお願いした。

昨年度から継続された外務省のカケハシ・プロジェクトのユダヤ研究者派遣(ロサンゼルスとサンフランシスコ)の第 2 回目を 2019 年 3 月に実施した。2 回目の派遣ではイスラーム地域出身のユダヤ人の文化組織や研究機関の訪問を企画し実現させた。ロサンゼルスの総領事公邸における現地ユダヤ人との交流会で報告者の現在の研究活動について説明した。現地の研究者や当事者からの反応などから、今後の調査の可能性が見えてきた。

## 【2019 年度】

最終年度はこれまでの調査研究のまとめと補足の調査を行い、今後の研究の進め方について考えた。本研究は地域と言語をより限定し、「ユダヤ人言語共同体の集団的記憶の形成と伝承: 旧オスマン帝国領のラディノ語の場合」として発展させることが決まった。これにより報告者は積極的に研究の展開を考えられるようになった。

これまではイスラーム地域に限定してきたが、非イスラーム地域の状況は調査してこなかった。しかし近接する異なる地域の比較が必須であると気が付いたので、8 月にイスタンブールに近いテッサロニキでラディノ語の状況を中心に現地調査し、イスタンブールの状況と比較することにした。テッサロニキでは現地の研究者、ラディノ語話者、ユダヤ博物館、ユダヤ人コミュニティー、旧ユダヤ人街、テッサロニキ旧鉄道駅などを訪問し、現地で働く人たちや訪問者に聞き取り調査した。これまで調査したイスラーム地域では、現地のユダヤ人について一般的な非ユダヤ人にはあまり知らないようであった。これに対しテッサロニキでは、非ユダヤ人と現地のユダヤ人が集合的記憶をある程度共有していることがわかった。とくにホロコーストの記憶はその重要な核の一つとして機能していることがわかった。東欧系ユダヤ人においてはホロコーストの記憶を再構成し、イディッシュ語学習活動がその継承活動の核となっている。ホロコーストは東西ヨーロッパ史のみならず、世界史にインパクトを持って位置づけられている。テッサロニキにおける集合的記憶も、ホロコーストによって大きな継承の流れに乗っていた。

イスタンブールでは、ユダヤ人研究者とジャーナリスト、法律家、新聞の編集者や記者、聖職者などを訪問した。さらに博物館やシナゴグ、個人宅などにおいて聞き取り調査を実施した。イスタンブールでは、先祖が 500 年以上前にスペインからきたというセファルディー系ユダヤ人が多数派で、ラディノ語の使用や継承活動も行われている。しかしその一方で、セファルディー系以外の多様なユダヤ人の存在や、トラウマ化された記憶、「語りにくさ」が存在する。現地のコミュニティの複雑性から集合的記憶の形成が単純ではないことがわかってきた。

帰国後 9 月に、イスラエルのユダヤ人の多様性が描かれているヘブライ語小説『アンチ』(Jonathan Yavin 著, 鴨志田聡子単訳, 岩波書店 2019) を出版した。ヤング・アダルト文学で読みやすく、イスラエルの移民社会や多言語社会としての実像を把握しやすい。イスラーム地域出身の作家のヘブライ語文学をより深く理解する上でも、この本に描かれているようなイスラエ

ルの移民やその子どもたちの格差の現状は重要である。

12月にエルサレム・ヘブライ大学でジュデズモ（ラディノ語の学術的な名称）の講座を参与観察した。ジュデズモの研究者にこれまでの調査について報告し、意見を求め、今後の調査の展開を相談した。また合宿形式で行われたイディッシュ語の言語学習活動を参与観察し、合宿の最後に参加者たちに向けて研究報告をした。

2020年1月にパレスチナ・イスラエルを専門とする研究者らと、イスラーム地域出身のユダヤ人と東欧系ユダヤ人への聞き取り調査を実施し比較している研究者と意見交換した。さらに3月に外務省のカケハシ・プロジェクトにおいて日本の若手研究者を引率し、ニューヨークとワシントンDCのユダヤ系組織を訪問した。イスラーム地域のユダヤ人の組織、東欧系ユダヤ人の組織などを訪問し、現地のユダヤ人と意見交換した。当事者による調査と非当事者による調査の違いについて意見交換する機会が得られた。また日本の研究者らが海外のユダヤ系の組織を訪問して交流したことが、今後日本における研究の発展に役立つと良いと考えている。

これまでの調査については、3月に国際会議 ucLADINO（ロサンゼルス）2020年6月に国際会議 XXI Congreso de Estudios Sefardies（マドリード）で発表することが決まっていたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で会議自体が延期となった。

3月から5月にかけて新型コロナウイルス感染拡大を受けて、ユダヤ人の間でもオンラインでの言語学習活動や文化継承活動が活発化した。彼らにとって文化的活動が「不可欠（エッセンシャル）」であることが確認できた。これはホロコースト下でも活発な文化活動が行われたことにも見られる。日本でも朗読、コンサート、合唱などの動画がたくさん作られた。生命の危機がある状況において、信頼できる人たちと集い文化的活動をすることは人間にとって非常に重要なのではないかと報告者は考えている。

ユダヤ人においては地理的に孤立している人とのつながり維持のため、オンラインでの活動がもともと活発である。新型コロナウイルス感染拡大に際して、多くの人々が社会的距離 w お取り孤立せざるを得なくなった。その際にユダヤ人主催の既存のオンライン上の集会在拡充されたり、対面式の集会在オンラインに迅速に移行されたりした。これまでのネットワークがさらに強化され拡大されたと考えられる。2020年後半から対面式の集会在世界的に徐々に可能となることが見込まれる。報告者は今後の展開を注視することで、彼らの文化的なネットワーク形成の特徴についての理解がより一層深まるだろうと期待している。

ユダヤ人のオンラインでの言語学習活動について「オンライン学習が築くユダヤの言語のボーダーレスな世界」（鴨志田聡子、東京大学現代文芸論研究室論集 れにくさ (10) 126-137, 2020）にまとめた。今後科研費を得て、SNS などにおけるオンライン上でのネットワークの形成と強化をテーマに調査をしたいと考えている。

イスラーム地域出身のユダヤ人はイスラエル移住後も、ある種の「疎外感」を感じ続けていたのかもしれない。実は東欧系ユダヤ人の多くも「疎外感」を感じてきたのではあるが、彼らはそれを結束力に変えて繋がりを形成してきた。これについてはイスラーム地域のユダヤ人と共有する機会がなかなかないようである。出身地が同じユダヤ人による言語や文化の継承活動は見られる。一方で出身地が異なるユダヤ人同士がお互いの独自文化を相互に分かち合う活動は、報告者の調査の中ではまだあまり見られない。しかしユダヤ人の中では、出身地の違うユダヤ人と婚姻関係や友人関係ができた場合、出身地の異なるユダヤ人の過去について親しい人から具体的に聞くことがある。さらにイスラーム地域出身作家たちが盛んにイスラーム地域の文化やイスラエルにおける生活を題材とした創作活動をし、関連する文化イベントも開かれている。報告者は彼らの集合的記憶の再構成や継承が更に活発化する可能性があると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Satoko Kamoshida	4. 巻 0
2. 論文標題 Ladino, judeo-espanyol, porque vinimos de Espanya: Memoria y cultura de los sefardies	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Actas del III Congreso Internacional (Online)	6. 最初と最後の頁 0
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鴨志田聡子	4. 巻 10
2. 論文標題 オンライン学習が築くユダヤの言語のボーダーレスな世界	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京大学現代文芸論研究室論集 れにくさ	6. 最初と最後の頁 126 - 137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鴨志田聡子	4. 巻 39
2. 論文標題 イスラム地域のユダヤ教徒たち：カイロとイスタンブールの場合	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京大学言語学論集 Tokyo University linguistic papers (TULIP)	6. 最初と最後の頁 145-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 7件/うち国際学会 6件）

1. 発表者名 Satoko Kamoshida
2. 発表標題 Vi halt men on yidish-limd in yapanisher universitetn
3. 学会等名 Yidish-sof-vokh（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Satoko Kamoshida
2. 発表標題 Culture, history and people: key factors for success of Judeo-Espanyol education for non-Jews
3. 学会等名 8th Annual ucLADINO Judeo-Spanish Symposium (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Satoko KAMOSHIDA
2. 発表標題 Culture, history and people: key factors for success of Judeo-Espanyol education for non-Jews
3. 学会等名 8th Annual ucLADINO Judeo-Spanish Symposium - La Boz del Pueblo: The Voices of Sephardic Jews, UCLA, The University of California, Los Angeles (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鴨志田聡子
2. 発表標題 「私たちはスペインから来た」ラディノ語の記憶と文化
3. 学会等名 III Congreso Internacional sobre el español y la cultura hispana en Japan, Instituto Cervantes Tokio (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Satoko KAMOSHIDA
2. 発表標題 Teaching Yiddish and creating a field called 'Jewish Studies' in Japan
3. 学会等名 International Forum of Young Scholars Alumni Workshop Marking the 15th Anniversary of the Nevzlin Center (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鴨志田聡子
2. 発表標題 イスラーム世界のユダヤ人：現在の様子を中心に
3. 学会等名 第2回「ユダヤ文献」研究会（東京大学本郷キャンパス）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鴨志田聡子
2. 発表標題 ユダヤ人の多様な言語 イディッシュ語とラディノ語を中心に
3. 学会等名 地球ことば村 ことばのサロン（慶應義塾大学日吉キャンパス）（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鴨志田聡子
2. 発表標題 建国が生んだ「ディアスポラ」：エジプトのユダヤ人の場合
3. 学会等名 関西パレスチナ研究会「2017年度第3回研究会」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所中東イスラーム研究拠点（人間文化研究機構「現代中東地域研究」事業）京都大学共催（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鴨志田聡子
2. 発表標題 イディッシュ語とは何語か会場名
3. 学会等名 ランチョンリングイスティックス
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Satoko Kamoshida
2. 発表標題 Eastern European Jews in Israel
3. 学会等名 the Alumni Workshop of the International Forum of Young Scholars on East European Jewry in Jerusalem (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Satoko Kamoshida
2. 発表標題 Yiddish as a Foreign Language in Japan
3. 学会等名 Yiddish in the New Millennium: A Symposium on New Yiddish Language and Culture in Ottawa (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 鴨志田聡子
2. 発表標題 イスラーム地域出身のユダヤ人と言語共同体
3. 学会等名 第16回東京移民言語フォーラム TAFIL16
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 ヨナタン・ヤヴィン、鴨志田 聡子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 294
3. 書名 アンチ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

(1)ユダヤ人と言語 Jews and Languages  
<http://syidish.hatenablog.com/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----